

二章 晶子と満子

恋人の巨乳美熟女が仕掛ける「三人交わり」で、挿入恐怖症を癒す
巨乳美熟女未亡人

【完全解禁版】

「満子ねえ、あなたの悩みを考えたら、あの人だったら、あなたのオマンコにオチンチンいれて気持ちよくしてもらえる。そうしたら挿入恐怖症、治せるんじゃないかって思ったのよ」

「晶子の言うのはわかる。オチンチンが、あなたのオマンコに入るところをずっと見てたら、優しいいれ方なのは間違いないと思った。速さの変化もすごかった。あたしのオマンコに、あの人がオチンチンいれてくれたら気持ちいいだろうなと思った。そしたら、我慢できなくなっ
てオナニーしちゃった」

「でしよう。あんなすごいエッチ見てたらオナニーしたくなるのは当たり前よ。紹介してあげるけどいい？」

「うん、お願いします」

「徹さん、こっち来ていただけける？」

「はい、ただいま」

胡坐を解くとそのまま四つん這いで進み、晶子の横で正座した。

すると満子も居住まいを正して正座する。

ほとんど裸の男女が正座で向き合った。知らない者が見れば、滑稽な姿だろう。

「初めまして坂井徹(さかい・とおる)と申します」

「こちらこそ、はじめまして飯尾満子(いいお・みつこ)と申します」

おたがい律義な挨拶で、お見合いの口上を交わすようだ。

満子がふと声を上げた。

「晶子、徹さんのオチンチンが大きくなってる」

さつき二人のディープキスを見ているうちに、イチモツが力を取り戻すのを感じた。
今見れば完全に仕上がっている。

「どう、満子、怖い？ あたし、このオチンチンは大きすぎないし、硬いし大好き。徹さん、満子に触らせてあげてもいいかしら？」

「どうぞ、どうぞ、好きなだけ可愛がってやって下さい」

『『いい』って、いってくださってるわよ。触らせていただきなさい』
「うん」

満子は返事をするとおずおずと手を伸ばし始めた。肉棒に触れるとすぐにあちらこちら触りまわし、玉袋まで触ったり握ったりしている。

「可愛いっ。男の人のオチンチンを心から可愛いって思えたの、亡くなった旦那さんのモノ以外、初めて。こんなオチンチンだったら、晶子がしてもらってみたいに、あたしのオマンコにいられてもらいたい」

「徹さんのオチンチンは、亡くなった旦那さんのとは違うけど、『可愛い』って満子は思ったみたい。満子のオマンコをよろしく願います」

「はい、わかりました。全力を尽くしますよ」

「じゃあ、満子さあ、最初してみたいに仰向けで、脚を広げて横になって」

晶子の言葉通りに満子がベッドに横たわった。満子の股間の前に、両脚を開いて膝をついた姿勢を取る。

晶子は自分用の枕を取って、満子の腰の下に敷いた。満子の淫部が枕のおかげで斜め上に向いた。

すると徹の肉棒と満子の股間の間に横から晶子が首を差しこむ。目の前にした満子の淫部に自らクンニを始めた。

当然の配慮だ。肉棒を入れる前に満子の肉穴を蜜液まみれにしておかないと、今までの苦勞が台無しだ。

それにその淫らな光景が徹の興奮を誘い、肉棒が勃起して怒張が大きくなる。それも晶子は計算にいれているに違いない。

その考えを察して、晶子が舐めやすいように場所を譲った。晶子はまず満子の淫部を確かめ、蜜液の溢れ具合を確かめる。徹に顔を向けると笑顔を見せた。

満子の小淫唇の内側にはどうやら蜜がたっぷり溜まっているようだ。

晶子は、すぐに淫唇の肉ビラの間にも二人差し指を入れてかき混ぜた。両指にたっぷりついた蜜液を、左右非対称な形をした二枚の肉ビラ唇の両方に、丹念に蜜液を塗り広げ始める。塗り

こめながら、当然、微妙に指を揺らして刺激を与えていた。

指に続けて、舌先も蜜壺に入れて蜜にまみれさせた。舌腹と舌裏でクリ包皮の上と周りの柔肌を舐めている。同時に蜜をのせていた。

もちろんクリ本体にはまだ触れない。

「あんっ」「うんっ」「いいい……」「あつ、あああんっ」「いいいいん」

満子があえぎを始めた。吐息の間に断続的に声上がる

白みを帯びた透明な蜜が両縦唇の下端から溢れ出していた。

大きな一本の液流が垂れている。そこから小枝のように筋濡れが何本も広がっていた。

蜜をたっぷりつけた指を使って、今度はクリトリスの鞘になっている包皮やその周辺に塗り

のせていく。注意深く露出を始めた淫芽本体にも、慎重に蜜液をやはりのせる感じで塗っている。筋濡れのない肌の上にも指をすべらせる。やがて蜜液が淫部全てに、塗り込められた。

晶子は左右の肉ビラしわ唇を、それぞれ舐めしゃぶり始めた。

しばらくすると両指に、舌がしていた、左右の肉ビラとその周りの淫部のいじり回し役を渡す。

膨らみ始めている淫芽と後ろに後退した包皮の両方に、晶子は自分の唇を当てた。舌を伸ばし、柔らかい舌の裏側でしばらく淫芽の包皮と淫芽の上をゆっくり動かす。

「ヒンツ、いいん、アアああん……グワングワンくるう」

と、満子から声が出た。それを合図に淫芽と包皮を吸い込んで舐めしゃぶる。しばらくして口から離れた淫芽は受けた快感の証拠にさらに膨らみを増し、包皮が後ろに下がった。

満子が、再び悲鳴とも聞こえそうな大きなよがり声を上げた。

ずっと見入っていた、徹にはクンニのお手本を見る思いである。さすが、女が女にするクンニテクは格段に上手い。

晶子が徹に声をかける。

「これであと仕上げをしたら、いれられるわよ。最後のあたしのアシストね」

今度は、晶子が徹の方に身を乗り出した。

右手で竿を握ると、肉棒の先から口にほおぼり、しごき舐めで皮を剥いた。

舌先で亀頭を二、三回キャンデイのようにチュパ、チャパ、チュバと舐める。

そして今度は、両手を徹の腰に置いて、ジュぼっ、ジュぼっ、ジュぼっとノーハンドの高速ピストンフェラを十回ほど繰り返した。まるで口内を膣穴にしたようなピストンだ。

「あたしの役目はこれまで。あとは徹さんに仕上げしてもらおうわ。交代よ」

徹と晶子は身を入れ替えた。晶子の最後のフェラで徹の怒張は最高潮に仕上がっている。

受ける満子の小淫唇も膣穴も蜜液まみれだ。よがり始めているからイクのには時間はかかるまじ。

満子の肌の赤みが濃くなり、うっすら汗が浮いて見える。双房も自分の両手指で揉みしだき

始めていた。

「満子さん、まずオチンチンの先っぼだけ入れます。すぐに激しく突いたりしませんから心配しないでくださいいね」

「はい」

小さな返事にやはり、満子の恐怖心を察する。

満子の淫部はまだ枕の上で、斜め上を向けて肉棒を待ち受けている。両脚はM字に開かれていた。

左手は、満子の腰の左を柔らかくつかむ。右手は、怒張して天を指している肉竿を握り下に向けた。

すぐに切っ先を、枕の上の淫部に開いた肉ピラしわ唇の隙間に挿し入れた。鈴口を底肌に当てて蜜中を探る。細長い割れ目になった膣穴入り口は鈴口の触覚でたやすく見つかった。ゆっくりと挿入する。しばらく亀頭のみを膣穴口近くに埋めて動かさない。満子と初めての肉馴染みをした。

「はいったわ。丸いのがはいったのわかる」

「満子さんの穴が、その丸い頭にゆっくり馴染んで開いていきますよ。たぶんジワツと気持ちいいはずですよ」

亀頭が満子の秘肉の柔らかさを味わう。包み込む柔らかさが強い。絞まりと同時に吸い込ま

れるような柔らかさだ。だが晶子の柔らかさとは少し違う。

「ホント、丸い頭に馴染んで穴のお肉が馴染むように開いてく。気持ちいいわああ」
まずは第一関門突破だ。

おたがい、この膣穴の入り口の肉馴染みをしばらく味わった。

頃合いが良いかとみて、満子に声をかける。

「じゃあ、奥までいれていきますね。ゆっくりゆっくり入れますから心配しないでください。
たぶん満子さんはすぐ気持ち良いと思います」

「はい」

今度の満子の声には恐怖心がほぼ消えている。

満子はM字開脚した両膝が上がっていた。

上半身を少し前傾させる。浮いた両膝の下のシートに両手をついた。肉棒をゆっくり押し込む。ついに肉棒が根元まで埋まった。肉竿が膣穴を進む中、柔らかく肉輪のヒダが亀頭や肉棒に絡み、至福の快感を呼ぶ触感があった。奥では蠢動が歓迎してくれる。亀頭が多くの触手でいじられる。

「満子さん、どうですか？ 痛くないですか？」

「ぜんぜん痛くなんかないわ。逆よ。穴の中のお肉がオチンチンの形に広がっていくのわかる」
この味わい深い肉馴染みの感触は、高速ピストンでは絶対味わえない。『肉馴染みは男女が

ポを刻んだ。淫らな打擲音楽が耳に心地良い。

肉棒は淫穴の柔らかさと絞まり具合、それに肉輪のヒダの絡みの快感をじっくり味える。だがその快感は、本能に精液発射のシグナルを送り続けていた。

しかし、繰り返して作る『理性の盾』もそれに頑強な抵抗を続けている。

ピストンのピッチを緩急に変えた。ピストンの速度を落とす時に、肉棒の切っ先で当てる圧の強弱の変化を続けて、Gスポット刺激を何度も執拗に続けた。

ついに、よがり声の中で、満子が声を上げた。

「出ちゃう、漏れちゃう、ごめんなさい」

淫唇から温かい透明の液体が大量に溢れ出した。肉棒がその特別の液体に完全に浸った。お湯の中でピストン挿抜をするような快感が味わえる。

潮を吹いてくれたのだ。腰のあたりまでがたっぷり濡れた。

さつきと同様に、うっすら汗をかき始めている。熱を帯びた身体にかかった潮は、温めながらも、水を浴びたよりも不思議に心地良い。

「イクわ。イキそう、イク、イク、イク、イックううう」

満子の蜜穴の絞めつけが一瞬ギューと、強まるのを感じた。

快感が神経を攻撃し、神経が射精本能を刺激する。

徹の理性が何とか耐え忍び、緩急ピストンを続ける。

満子は一瞬身体を弓なりにしてこわばらせた。だが、すぐに痙攣を始めている。

その中でピストンを続けた。

「えっ、なんで？　なんで？　オチンチン硬いままなの？　すごい、また感じる……」

満子は絶頂の余韻の中で味わう、新たな快感に驚いている。

相変わらず、本能と闘い『理性の盾』で発射を懸命に堪えながら、同時に最高の喜びを味わっていた。

しかし、やがてその時がやってくる。

「またイク、イク、イクわ。イク、イク、イツくううッ」

その声の一瞬前に、徹の理性は本能に完全に屈した。『理性の盾』が完全に破壊されたのだ。

ちょうど満子の膣の二度目の絞まりが強くなる瞬間、精液の稲妻が駆け抜け鈴口に迫る。

腰に衝撃を受けた。脈動とともに、ドクン、びゅるっ、ビュルルツと幾度もの白濁液の放出が始まる。

満子は二度目の絶頂に再び身体を弓なりに反らせると一瞬こわばり、その後長い痙攣の後、弛緩していった。豊かな双房が悦びに震えている。

たまらず縮んだ肉棒を膣穴から抜き、小淫唇の肉ビラの間から抜くと、両膝をついた姿勢のまま後ろに倒れ込んでしまった。天井を見る。息は荒く、疲労困憊した感がある。晶子との交接よりはるかにすぐく、満足感のある肉交だった。今までの女性とのまぐあい経験の中でも、

想い出に残るものになった。

「ありがとう。ホントにありがとう、この子、オチンチン嫌いなんて、きっと二度といわないわ」

晶子が優しく声をかけてくれた。

そしてタオルで汗を拭いてくれる。一通り拭き終わるとナイトガウンをカーペットから拾って羽織った。徹の額に軽いキスをして、すぐに寝室を出ていく。